

共同利用・共同研究課題「チベット・ヒマラヤ牧畜文化論の構築—民俗語彙の体系的比較にもとづいて—」（2021年度第3回研究会）

2021年12月11日(土曜日) 午前13時より午後18時半、ハイブリッド開催

本共同研究課題の第3回目となる研究会では、3件の発表と、発表に関する質疑応答・情報提供、今後の共同研究の活動に関する全体討論を行った。当日のプログラムは以下のようである。

#### 発表1

南太加（AA研共同研究員，青海民族大学）

「チベット高原における伝統的牧畜から現代的牧畜への転換—ツェコ県ラカル・モデルの事例から—」

質疑応答・情報提供

#### 発表2

別所裕介（AA研共同研究員，駒澤大学）

「チベットの屠畜法における窒息殺の遍在と地域的偏差——異民族との隣接関係に着目して」

質疑応答・情報提供

#### 発表3

星泉（AA研所員）

「チベット・ヒマラヤ牧畜農耕資源データベースにもとづく乳加工の地域間比較研究」

質疑応答・情報提供

#### 全体討論（進行：海老原）

南太加は、「チベット高原における伝統的牧畜から現代的牧畜への転換—ツェコ県ラカル・モデルの事例から—」と題する発表の中で、まず、「牧畜の終わり」として牧草地の私有化、牧畜業の市場化、牧畜民の定住化、牧畜社会の転換、生態保全など現在のチベット高原の牧畜をめぐる状況について述べ、それに対する政策と実践を紹介した。その実践のひとつとしてツェコ県ラカル村の事例がとりあげられた。ラカル村はもともと農業地域から移動してきた村で牧畜の経験は浅く、また放牧地も狭いものの、生活向上のために2010年よりはじめた合作社の事業の成功により、ラカル・モデルを学びに各地から研修がおとずれるなど、模倣の対象となった。ラカル村での合作社事業の実践事例として、ヤクと種ヤクの交配、農業知識を前提とする牧草の栽培、観光業への事業拡大などが取り上げられた。質疑では、ヤクと種ヤクの交配についての事実

確認や、ラカル・モデルの成功理由、今後の牧畜業のあり方についての考えを問う質問がなされた。

別所は、「チベットの屠畜法における窒息殺の遍在と地域的偏差——異民族との隣接関係に着目して」と題する発表において、用例 DB および、各種文献にもとづいて、チベット・ヒマラヤおよび、その周辺地域における家畜の屠畜方法（窒息法、刺殺法、撲殺法、腹割法、喉搔法）についてのデータを収集・分析し、チベットにおいては窒息法が遍在しており、周辺部に漢族の屠畜方法の影響が見られることを指摘した。チベットにおける窒息法遍在の理由としては、畜種を問わず家畜を無力化できることをあげ、相対的に食肉行為は、民族よりもエスニシティの文脈での分析が妥当であると述べた。質疑では、チベット・ヒマラヤ周辺部での屠畜の事例が参加者から寄せられた。また、窒息法と同様に「無力化」が可能である撲殺法をなぜ使わないのかという質問や、窒息法を選択する理由に、血を残した肉の味を好むという「おいしさ」という指標も関係するのではないかという指摘があった。

星は「チベット・ヒマラヤ牧畜農耕資源データベースにもとづく乳加工の地域間比較研究」と題する発表において、現在、構築中の「チベット・ヒマラヤ牧畜農耕資源データベース」の概要と新規機能について紹介した後、同データベースを用いて整理した、乳文化に関わる語彙のうち、特にチーズの加工方法に着目し、これまで指摘されていなかった、チベット・ヒマラヤ地域のチーズ加工プロセスとチーズの種類を提示した。質疑では、調査する季節の限られたフィールドワークの限界を補完する文献の重要性が指摘され、本発表で提示された調査票を用いてフィールドワークを行うことで新たな知見を得られる可能性について意見があった。

全体討論では、成果論集の編集予定と、今後の予定について、参加者の近況報告などが行われた。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.